

丁寧な埋葬

オルタナ旧市街

きゆうしがい

昨年の暮れ、ふと思いついて都内のホテルに宿泊した。帰省すべき場所も特になく、ハイシーズンにわざわざ旅行という気にもなれず、毎年のことながら年の瀬の時間をなんとなく持て余していたのだ。多くの人が東京を出ていく長期休暇の期間は、自分で選び取った過ごし方のはずなのに、世の中と逆流しているような心細さがある。変わり映えのしない自宅で過ごす休暇というものに飽き飽きしていたし、ちよつと趣向を変えてみようじゃないか、と近場のホテルを検索してみれば、思いのほか手頃な空室がまだあるではないか。家からさほど遠くもない場所に、わざわざお金を払って泊まる。もつたいないような気にもなるけれど、私はこの遊びが結構好きだ。何ととっても都内には一度は泊まってみたいと思わせるような名のあるホテルがいくつもある。荷物も最小限でよいし、たまの気晴らしにちょうどいいお気軽な贅沢だ。

日比谷駅からほど近いホテルに到着すると、フロントは年末らしくにぎわっていて、家族連れの外国人観光客や、仲睦まじそうな老夫婦など、そこにあふれるさまざまな人の往来をロビーのソファからしばし眺める。クリスマスでも正月でもない、年末という狭間を持つ特有の間延びた空気感もなんだか良い。

一方でこの空間は、映画の中で街の人々が逃げ込んできた避難所のような、みんなで大きな何かを過ぎ去るのを待っているような、どこか緊張感のある雰囲気も同時に内包していた。今日に限った話ではない、ホテルというのはいつもそうだ。得も言われぬ胸のざわめきの正体は何なのかはわからなかったが、ここに集う人たち同士の関係性が、この先変化することは無いのだろう、という予感があつた。

ホテルは数百の客室を擁するクラシカルな建物で、チェックインしてからは客室でくつろぐのもそこそ

こに、宴会場や食堂や地下のプティックまで、共有部をあちこち歩いて探検した。どこに泊まってもいえることだが、同じ建物に大勢の人が宿泊しているはずなのに、こうした施設には時々「絶対に誰もいない空間」が存在する。営業時間を終えた売店、長い廊下、客室前の自販機コーナー、別館へ続くエレベーターホール、使われていない宴会場、清掃カーだけが置かれたバックヤードの入り口。他者と共有しているはずの場所で、こうしたエラーのような空間は不意に現れる。よく似た別の世界と、思いがけず接続してしまったかのように。

あのような空間のことをどうやら「リミナルスペース」という言葉で表すらしいと知ったのは最近の

ことだ。Liminal=閾、境界、通過途中、という意味をはらんでおり、主に無人の都市空間を持つ不安定さや不気味さを象徴する言葉らしい。もとは「通過点」を指す建築用語だったそうだが、転じてネット上では前述のような概念として確立されているのだとか。なるほど、オフィスビルや駅構内、たしかに人口密度からすれば一見不可解なほどに、無人の都市空間というものは、存外あちこちに存在する。改札の向こうには無数の乗客がひしめくプラットフォームがあるはずなのに、駅のコンコースにはなぜか誰もいないというのはよくあることだ。ただし、それは私にとっては恐怖を連想させるものではなかった。リミナルスペースとは捨て置かれた空間ではなく、過去にも未来にも属さない記憶の集積であり、そしてそれは現在という時間軸に対する丁寧な埋葬のようだとも思う。幻想に限りなく似て、立ち去れば煙のごとくたちまち消失する。「通過点」とは言い得て妙だ。

ホテルの薄暗い廊下はどこまでも続いていくように見えたが、同時に全ての客室に通じてもいる。使われていない空間にも、管理や配慮の痕跡はどこかに残されているのかもしれない。階下の喧騒を音楽のように耳で捉えながら、それからの時間はただ、なめらかな孤独を楽しんだ。



いい廊下は合わせ鏡のようでもある

時の調べ Essay

略歴
個人で営む架空の文芸クラブ。
2019年から、文学フリマを中心に創作活動を行う。文芸誌『代わりに読む人』、『小説すばる』、『文學界』などにも寄稿。
2024年、随筆集『踊る幽霊』（柏書房）でデビュー。最新刊は小説『お口に合いませんでした』（太田出版）